

空手道詳説（20）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その4. 尚真王以降の琉球国）

（1）尚清王とその子孫

ア 尚清王の治世

即位と冊封使

第4代尚清王（1497～1555年、在位：1427～55年）は第3代尚真王の五男、母は第二夫人の華后（生年不詳～1516年）である。おそらく、1501年には王位継承者となっていた。

尚真王が築造した王家の陵墓・玉陵（たまうどうん）に被葬者の資格を記した碑である「玉陵の碑文」の五番目に記される、『御一人中ぐすくのおんし まにきよたる』（中城の王子、真仁堯樽）が尚清で、このとき数え年5歳で、「中城の王子」とは首里城に住む王子を意味し、王位継承者となる。

尚清は父が死去した翌年に即位したが、前王の5男が王位に着いたことを不審に思った明国は、冊封使の派遣を一時見合わせていた。琉球側は、正当な王位継承であると国中から嘆願書を集め願い出て、8年後の1534年によりやく実現している。

奄美制圧

尚清王が即位して10年後の1537年、奄美大島で与湾大親（ゆわんうふや、生年不詳～1537年）の乱を鎮圧している。

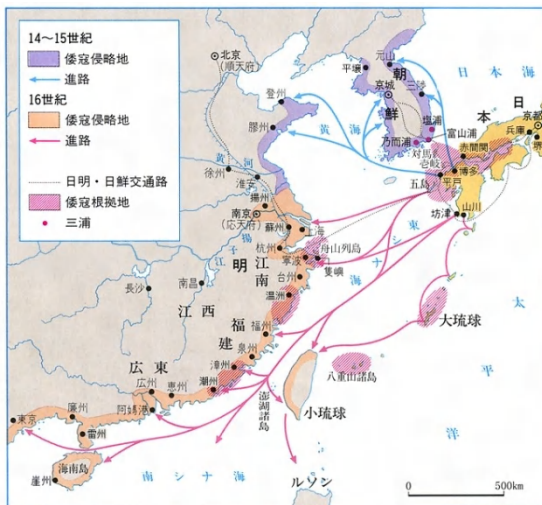
与湾大親の乱とは、奄美を治めていた豪族（大親）の一人である与湾大親は、善政を敷き人民から信望も厚かったとが、他の大親たちの妬みにより反逆の企てありと讒言されたため、尚清王は大島に征伐軍を派遣した。

軍隊が上陸すると、身に覚えのない与湾大親は、悔しさの内に自ら命を絶ち息子の糠中城が首里城に連行された。糠中城は父の潔白を主張し、それを聞いた王は

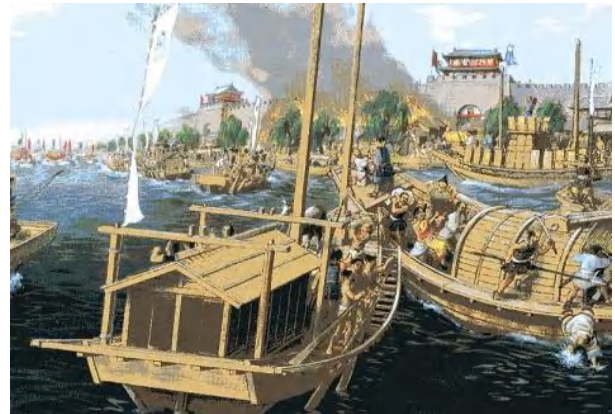
後に糠中城を重用し、その子孫は三司官を多数輩出するなど、後々まで屈指の名門として栄えている。

倭寇への防備

尚清王は、倭寇に対する防備の強化に功績を挙げたといわれている。倭寇とは13世紀から15世紀にかけて朝鮮半島、中国大陸沿岸部や一部内陸、東アジア諸地域において跳梁跋扈した海賊行為や密貿易を行う集団で、日本人が主で、一部高麗人や中国人などによって構成され、神出鬼没の略奪行為は周辺国に脅威となっていた。尚清はこれら倭寇に対し、対応できる船団や軍備の増強を図り、防備と圧力強化に業績を挙げている。



倭寇の侵略経路の図



倭寇船、侵略の絵

首里城門の建造

尚清王が築いた首里城に通じる城門として、「守礼門」と「継世門」がある。

守礼門は首里城の正門に当たる。今はその名のとおり「守禮之邦」の扁額で知られるが、この扁額は当初からあったものではない。建造当時は「待賢」、後に「首里」であった。その経緯は、尚永王即位の冊封使節の派遣に際し、明国皇帝の萬曆帝から下された『琉球は守礼の邦と称するに足りる』という詔勅の文章に拠ったもので、これを受けた尚永王が「守禮之邦」の扁額を造らせた。その後、普段は「首里」の額を掲げながら、新王即位に際して訪れる冊封使が訪れている間だけ「守禮之邦」の扁額を掲げたもので、常時「守禮之邦」の扁額を掲げるようになったのは、第9代尚質王（1629～68年、在位1648～68年）の時代であった。

「守禮之邦」という言葉は、一見、礼を重んじ礼を尽くすという琉球国民の強い観念から自ら選んだ言葉と思われがちだが、他国（明国）から受けた高い評価によるものである。

一方、継世門は首里城外郭の石造りの門で裏門にあたる。別名「添継御門」という。この門は、国王が没すると世子はこの門を通過して御内原世誇御殿に入り、即位の礼を行ったことで知られる。

註：禮は礼の旧字体。



守礼門



継世門

玉陵碑文の無視

先に触れたように、尚真王の母后・宇喜也嘉が1505年に死亡したとき、尚真王は40歳になっていた。玉陵（たまうどうん）の完成から4年経過していた。「玉陵の碑文」は玉陵に葬られるべき9名の有資格者名を記したものであり、最後の添え書きに『この書きつけにそむく者あらば、天を仰ぎ、地に伏して崇るべし』（筆者意訳）と。凄惨なる呪い文が記されている。

この碑文は、母后の言葉でもあり尚真王の時代は遵守されてきた。しかし、尚清王の時代となると違っていった。

そもそも宇喜也嘉という人物は、第2代王の尚宣威王に対して偏執で狂気とも言える嫌悪の感情を持ち、その結果が招いた異常事態だったという認識が尚清王以降の人たちにあった。祖母の宇喜也嘉や父王の尚真と違って、次第に初代王尚円ゆかりの血縁者同士という一般的な関係に修復されていったのである。

尚清王は、本来ならば第4代王となるべくして生れたはずの兄・尚維衡に対する意識が強く、尚維衡が1540年に死亡し領地の浦添にあった「浦添ようどれ」（「ようどれ」は夕風。崖の中腹をえぐって造られた墓陵で、夕風が美しく見えたための名称か）に葬られると、その後遺骨を移し玉陵に改葬している。また、葬られるべきとして記されている王女や王子は玉陵には葬らなかった。

イ 尚元王、尚永王と尚寧王

尚元王の即位

第5代の尚元王（1528～72年、在位：1556～72年）は、尚清王の次男であるが王妃の子で、世継ぎであった。

しかし、尚清王が薨去したとき、三司官のうち2人は、世継ぎの尚元が病弱であるとの理由から4男の尚鑑心を王に推したため、尚元との間で後継王争いが起きる。琉球国は、どうも後継争いが絶えない特質を持つようだ。

幸いに、残る三司官の一人である新城安基は、前王の遺命であり常道であると強く説いたため、尚元は28歳で第5代王に即位し、鑑心を担ぎあげた三司官の二人は遠島の刑の処せられている。

島津藩の難題

尚元王は、島津藩（島津貴久）との関係を良好に保つために腐心し、交流の中から功を奏したかに見えたが、晩年の1570年と1572年の2回、島津藩から派遣されてきた僧侶雪岑（せっしん）との間に接待の非礼を咎めだてされ、難問を突きつけられた。その難問とは次である。

- ① 琉球で一番高い山を島津まで運んでくるように。
- ② 灰で編んだ縄を持ってくるように。
- ③ 雄鳥が産んだ雛を持参するように。

島津も大人げない意地悪をするものだと思うが、雪岑への非礼それ自体、琉球国を窮地に追い込もうとする言い掛かりであろう。

琉球国側は、これら全てを智慧でもって解決したとされている。どんな「一休まがい」の知恵であったのか分からないが、側近に知恵者が居たことは確かなようだ。

倭寇対策と奄美親征

当時の倭寇は大和人（日本人）が多く、大勢の明国人がさらわれ大和に連行されたのに対し、尚元王がこの人たちを買い上げて明国に返してやったため、明国との関係は極めて良好であった。

尚元王が薨去する前年には、奄美大島人が朝貢を拒むなど従順ならざると行動に出たため、自ら軍を率いて遠征し、頑強な抵抗に遭いながらも完全制圧している。

尚元王王女の婚姻

尚元王には3男1女があつて、王女は首里大君按司（一枝）といった。宇喜也嘉が執拗に嫌っていた尚維衡の孫・尚懿（しょうい、生年不詳～1584年）に嫁がせている。

なお、尚懿の母は尚真王7男の娘であつたから、親同士はいとこ関係となる。そして尚懿と一枝の間に生まれたのが、尚永王の薨去後に第7代王となる尚寧である。

尚永王の即位

尚永王（1559～89年、在位：1573～88年）は、1572年に父王が薨じると第6代王に即位した。1579年に明王朝から冊封を受けている。事績に特に見るべきところはなく、1589年在位6年にして30歳の若さで早世した。王子はなく、二人の王女を残した。

尚寧王の即位

尚永王に王子がなかったため、尚元王の王女が嫁ぎ尚懿との間に生まれた長男の尚寧（1564～1620年、在位：1589～1620年）が、尚永王の長女真錢金（生年不詳～1663年）に婿入りし、第7代王となる。母が第5代尚元王の妹であるから、尚元王からみれば甥となる。

尚寧王の時代は、琉球国史上最大の危難で大事変といえる「薩摩藩による琉球侵略」の受難を受け、尚寧王は捕虜となって薩摩藩に連行されるという非常事態に遭う。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行